

広島大学平和科学研究センター

Newsletter

2014年



〒730-0053 広島市中区東千田町 1-1-89

tel: 082-542-6975 fax: 082-245-0585

email: heiwa@hiroshima-u.ac.jp

http://home.hiroshima-u.ac.jp/heiwa



就任のご挨拶

広島大学平和科学研究センター長
(前国際連合日本政府代表部 特命全権大使)
西田 恒夫

この度4月1日をもって、平和科学研究センター長に就任いたしました。よろしくお願
いいたします。

私は1970年東大紛争の余燼残る大学を後にし、外務省に入省して以来、昨年秋に国連
大使を最後に退官するまで40年以上わが国外交に携わってまいりました。その間初任地た
る東ベルリンから、モスクワ、ワシントン、ロスアンジェルス、オタワ(カナダ)を経、
ニューヨークまで各地に勤務し、その時々国際社会の奔流を身をもって体験してまいり
ました。

冷戦の終了、9.11、中国の台頭、3.11、アラブの春などなど世界はまさに激し
く動き、海図無き航海を続けています。かかる荒々しい世界にあって日本も一人超然と平
和と繁栄を享受することは許されません。ベトナム戦争、ニクソンショック、オイルショ
ック、アジア金融危機、長きに亘る経済停滞、3.11などの大規模災害、北朝鮮問題な
どわが国が直面してきた困難な問題は枚挙に暇がありません。

そして2014年の今日、引き続き経済回復に努める中、高齢化少子化、エネルギー問題、
災害対策などの構造的課題に向き合っています。外交面にあっては、中韓をはじめとする
隣国との関係は歴史問題、領土問題を巡って、大きく軋んでいます。目を転じれば、3年
以上に亘るシリア問題に加え、突如ウクライナの危機が発生し、冷戦の亡霊に脅かされて
います。その間、世界は、貧困が続きテロと暴力が跋扈し、多数の無垢の人々が至る所で、
日々犠牲になっています。

世界はまさに混迷し、将来への道行きが見えません。

同時に明らかになりつつあることは、おそらく少なくとも二つあるように思われます。第一に、世界がありとあらゆる困難な課題に直面する中、ことを仕切れる国が無くなったとのパーセプションが広がっていること。第二に、すべての問題が、経済金融に留まらずグローバル化し、対岸の火事として、片付ける余地がますます狭まっていることでもあります。この二つが合わさるとき、「グローバルガバナンスの欠如」が以前にまして重要な論題となってきたのは、当然のことと考えられます。

日本は如何にして、指導的な国際的地位を堅持し、その主張、政策を展開すべきなのでしょう。上述の如くすべての問題がグローバル化し、同時に互いに複雑に絡み合う今日、193の国が集う国連が、我が国が信じ、推進する価値とそれに裏付けられた政策を説き、同志を募る舞台として、最も重要かつ効果的な場であることは疑いのないところでありませぬ。特に、「仕切れる国が無い状況」が暫く続くとすれば尚更でありませぬ。

では、日本は日本発で何を今日、そして明日の世界に訴えたいのでしょうか。世界はその日本の声に耳を傾けるのでしょうか。

私は戦後の我々日本人の歩み自体が稀にみる強力で他人を惹きつけるメッセージであると確信をしています。日本ほど好感度の高い国は世界広しといえどありません。それは、日本が達成した平和繁栄であり、礼儀正しく、互いを思いやる心やさしい国民であり、自然を慈しみ、豊かな文化を守り育てる伝統です。勤勉で労を厭いません。貧富の差は小さく、民主主義、法の支配が行き届き安全な社会です。

この日本であればこそ、非核、軍縮不拡散、開発をはじめとする政策課題を声高に訴えるに最もふさわしい。

同時にかかる主張は、未曾有の悲劇からの希求に基づきつつ、「核のない世界の実現」に向けて確実に一歩を進める具体的な道程探求が伴うことが何より重要です。

広島大学平和科学研究センターは、これまでの長い歴史と豊かな実績の上に、日本とりわけ広島の地より、非核に向けての具体的道程探求の国民的努力の一環を担って参る決意であります。そのためには、第一に広島市民、県民皆様の積極的なご参加協力が不可欠であり、加えて、広く世界にネットワークを築くことも焦眉の急と認識しています。

広島メッセージが世界のメッセージとなるために、各位のご指導ご鞭撻を衷心より願っています。

2014年4月1日

2013年度平和科学研究センター活動

シンポジウム

○平和科学研究センター第38回シンポジウム「これからの平和研究を考える」

(2014年3月15日) 広島大学東千田キャンパスにおいて開催

報告：佐藤幸男 (富山大学人間発達科学部 教授)

「岐路にある平和学」

山根達郎 (広島大学国際協力研究科 准教授)

「平和のための新しい国際紛争論」

友次晋介 (名古屋短期大学英語コミュニケーション学科 助教)

「核と人間の安全保障－平和研究と安全保障学の交叉」

研究会

第195回 (2013年6月3日) 研究会

菅野哲 (福島県飯舘村旧住民)

「飯舘村村民の避難生活の現状、そして今後は」

第196回 (2014年1月21日) 研究会

久保田弘信 (フォトジャーナリスト－2001年「ギャラクシー賞」受賞)

「シリア内戦の現状と国際社会」

出版物

○『広島平和科学』(第35号、2014年3月)

所収論文：

Tatsuo YAMANE, “Securing Security Governance in Post-conflict Situation: A Framework of Conflict Prevention through ECOWARN in West African Region”

三上貴教「「ひろしまレポート」ランキング化試論－地球平和指数ランキングとの比較を交えて－」

村上登司文「ドイツの平和教育の考察－ギムナジウムでの調査を中心に－」

松浦陽子・佐藤健一・川野徳幸「広島への平和観－平和宣言を通して－」

辛亨根・川野徳幸「韓国人被爆者問題をめぐる草の根交流」

○研究報告シリーズ (和文)

No.49 山下明博

『軍事目的の無人航空機の危険性』

外部資金等受入状況（2013年度）

＜科学研究費補助金＞

研究代表者：川野 徳幸

研究種目：平成 23－25 年度科学研究費補助金基盤研究（B）

研究課題：カザフスタン共和国セミパラチンスク地区住民の被ばく被害に関する総合的研究

補助金額：13,650,000 円（H23-25 年度総額）

研究体制（2014年4月1日時点）

西田恒夫 センター長・特任教授（前国際連合日本政府代表部 特命全権大使）

木曾 功 特任教授（前ユネスコ日本政府代表部 特命全権大使）

川野徳幸 教授（原爆・被ばく研究、平和学）

友次晋介 准教授（核不拡散、国際政治学）

小倉亜紗美 助教（環境保全、環境平和学）

（兼任）

学内研究員：22 名

客員研究員：40 名

顧問：6 名

※（ ）内は前職あるいは専門